

第二十六回法華經・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

パネルディスカッション

司会 お待たせしました。それでは、再開させていただきます。

質疑応答に入る前に、四先生に、皆さんのご発表を聞いた上で、何か追加のコメントがありましたら、各々十分程度で、お願いいたします。まずは、蓑輪先生からお願いいたします。

蓑輪 私の話は、原始仏教から説き起こして、実際に今を気づくというのが具体的にどうということなのか、それがどういう意味を持っているのかということを中心に、話をさせていただきました。

現在、そのように気付くということが正面に出て、実践しているグループが幾つか出てきています。一九八〇年代の後半ぐらいから、東南アジアの仏教が日本に少しずつ進出してきました。samathaやvipassanāという名称で社会の中に少しずつ広がってきました。

二〇〇〇年前後頃からだと思っておりますが、今度はマインドフルネスという名前です。社会の中に少しずつ広まりつつあるのではないかと思います。マインドフルネスは起源がいくつかありまして、仏教系の方でマインドフルネスという言葉を使って仏教の瞑想を推奨していらっしゃる方が、フランスに拠点を持っているティク・ナット・ハンさんです。それからもう一方は、アメリカのフロリダだと思いましたが、女性の方でジョアン・ハリファクスという方です。彼女も心を見つめて気づいていくということを大事にいらっしゃいます。その方はグレースという標語を使

つていまして、具体的に社会の中でどういう実践をすればよいのかというのを正面に立てていらつしゃいます。

それから、宗教性を抜きにしたマインドフルネスというものも出てきておりまして、これはアメリカのマサチューセツ工科大学の先生でいらつしゃった、ジョン・カバット・ジンという先生が中心になって進めていらつしゃいます。ジョン・カバット・ジンさんのマインドフルネス提唱は、ストレス低減法という名前でも世の中に出ています。ジョン・カバット・ジンさんは何に基づいてそれを作られたかといいますと、何と一番基本になったのは、曹洞宗、道元の『正法眼蔵』だとおっしゃっています。ですから、日本禅宗の中に伝わっていたものをもう一度見直して、ストレス低減法という形にして再生させたということが出来ます。仏教の心の観察である気づきというものを、社会的に応用しようとしてされています。

そういうのを見聞するようになりまして、日本の仏教界も、きちんとお釈迦様の教えを伝えてきていたのだと実感するようになってきました。日本の仏教界もなかなか大したものであると、最近では思っています。

曹洞宗にしても、臨済宗にしても、瞑想の中の具体的な方法というのは、あまり表に出してくだいませんけれども、仄聞するところだと、面白い工夫がきちんと伝わっていて、日蓮宗のお題目にしても、伝統がどこかにあるんじゃないかなと期待しています。お題目を唱えるところから、私たちの心を見つめていくということがきちんとできていくというのは、とても大事なことだと思っております。

今日の各先生方の発表を聞いていまして、それぞれの先生方がご自身の体験に基づきながら、今現在に通用する工夫をしっかりなさっているんだなと、発表を聞いていて実感しました。

大学で教鞭をとっておりますので、現在の東南アジアの仏教界にも少し関心を持っておりまして、各地の調査とかにも出向いたりもするんですけど、その地のいろいろな行法を見えますと、經典の中には説かれていなかったものが、ちゃんとその主旨に合っていれば問題ないということで、それが新しい形として受け入れられているという実

態を幾つも目にいたしました。

そのうちのひとつとして分かりやすい例だと思いましたが、入息出息観という、入る息・出る息を観察するものです。経典の中では、鼻から入ってくる呼吸だけを見ていくのですけども、最近の東南アジアで大変に力を持つようになりました。マハーシー・サヤドーという方が始めて実践している中には、お腹の膨らみ・へこみを観察の対象にして、それを気づくということをやっています。随分色々なところで応用されています。今実際に気づくというのは、自分の体の動きでもいいものです。伝統的には歩くというのが気づきの対象になっていましたけども、足の不自由な方たちしてみると歩くことはできません。それで、現在のタイでは、自分の手をすね、お腹のところにもつきて、そしてまた上に上げて下ろしていく、そういう手の動きを気づきの対象にするという新しい工夫が出てきています。

ですので、お題目というのも、様々な意味を持って、それぞれの方が工夫をして、目指していた世界が見えてくるのであれば、様々なバリエーションがあっているのではないかなと思いました。特に赤堀上人の紹介してくださった様々な唱題行というのには、ちょっと目からうろこというような感じのところがありました。簡単ですが、以上でございます。

司会 ありがとうございます。続きまして影山先生お願いします。

影山 私は、実践的立場というところが重要なところだと思います。実践的立場といつても、この宗内的な実践的立場で語ってしまうと、世間の方々には、そのボールが届かないと思います。

とくに現代社会というのは、特定宗教に居場所がない状況ですから、普通のごく当たり前の人間関係の中で、「日

蓮さん、ありがたいよね」とか、「お題目が、こうだよね」と言ってしまうと、そこでは会話が途絶えてしまう。ということ、その会話が、世間一般では通用しない、特殊な会話になるわけです。

ところが、同じような宗教的なことでも、一般的にいう「瞑想」のことですが、それは世間には通用しており、居場所があるわけです。それがいま流行になっているマインドフルネスというわけです。

たとえば、小さなカルチャーセンターなどで、ヨーガを習っている方、ヨーガの愛好者がどれほどいるか。一般社団法人「日本ヨーガ療法学会」という組織が、全国的規模のアンケート調査をした結果、大体、新興教団くらい、三百万人くらいがヨーガを実践しているんです。ということは、それだけの力というか、それだけの効用があるから、社会に受容されているわけです。

それから、たとえば、さきほど蓑輪先生がおっしゃったように、ヴィパッサナー系の瞑想センター、もっとも古くはゴエンカさんがインドで瞑想センターを開きましたが、その十日間の瞑想セミナーを日本でも行っていますが、そのゴエンカさんの瞑想プログラムは、ゴエンカさんがミャンマーの在家瞑想指導者についてヴィパッサナー瞑想を習ってインドに帰り、またインドのヨーガ療法の研究所とコネクトして、仏教の瞑想技術から宗教的な要素を取りのぞきながら、現在のマインドフルネスというような方向性に作りかえていった経緯があります。

つまり、実践的立場というのは、現代人の視線に立ったということ、特定宗教にしないということです。たとえば宗教ごとであっても、さきのマインドフルネスのように、一般の方々が日常会話でつかっても違和感のない、言葉なり、言い回しなりを追求していかないといけない。日蓮聖人のお題目という宗教談義を世間の人々に理解してもらうためには、その日蓮聖人の話の前に、一つ階段をつけないと思うのです。これが実践的立場であって、教義的な言葉の理解や解釈ではない実践の立場、お題目を実際に唱えたら、心身が健康になるとか、幸せになるとかの調査研究につながる、これが教化学という一つの体系になると私は考えています。

司会 ありがとうございます。引き続きまして、高佐先生、お願い致します。

高佐 影山先生のお話の中に、創価学会のことが出て来ました。時々問題になるのは、創価学会の題目はどうなんだという話です。「南無妙法蓮華経」と、私たちと同じようにお唱えになっているわけですけども、唱題成佛ということになって来るのかどうか。そういう問題もちきんと考えて行かないとならないと思います。現在、世界中で一番たくさん御題目を唱える信者を育成しているのは創価学会であり、残念ながら我が日蓮宗教団ではないわけでもございますが、こうした問題もどう受け止めるのか。

また、創価学会では、最近、創価学会佛、つまり創価学会そのものが佛である、という表現をし始めているのだそうです。創価学会内部でも、抵抗感を持つ方もいらっしゃるようですけれども、先ほど私がお話しさせて頂いたうちの、衆生成佛とか社会成佛とかいうことに繋がって行く一つのステップとして捉えれば、創価学会の中で、創価学会佛という考え方が出て来ても不思議ではないとも思います。

発題では触れることが出来なかったこととしては、こうしたことについて、付け加えさせて頂いただけだと思います。それからもう一つ。これは、有り難いお話を伺った後なので、少々申し上げ難いのですが、やはり日蓮佛教は、どこまで行っても以信代慧の法門でございまして、先ほど、三原所長も引用されていた「末代幼稚の頸に懸けしめ玉ふ」という祖文に触れさせて頂いた次第です。ですから、「冥想」というものは、「そういうものあるね」というレベルに留めないとマズイ。唱題成佛論のメインストリームにマインドフルネスの話を持って来てはならない、と私は思います。

休憩時間中に、そういうことも話題にしましょうと打ち合わせしましたので、今きつと隣で影山先生が怖い顔をされているかもしれないと思いつながら、指摘させて頂きます。

司会 それでは最後に、赤堀先生、お願い致します。

赤堀 先ほど講演の初めに、高佐上人が、唱題成仏論というものが高佐宗の中では意外というか、ほとんどされていない。しかも、その中で、実際に仏と成った、あるいは仏としての立場から、経験的なものが語られていないということをお話しされました。

それでは、なぜ唱題成仏と言わないのかと考えてみたのですけれども。

まず一番めに、浄土真宗でこういう批判をするのです、「法華仏になるならば、馬の糞も黄金になる」と。これは、当たっているような、当たっていないような、ふざけた言葉ですけれども。これは、誰もがなれるということ、なった意味がどこにあるのだ、どこも変わってないじゃないかということからの批判です。

二番めに、仏になっているかというと、それにふさわしいことをやっているのかと批判されるので言えない。私は今日から、「赤堀は仏のくせに何をやっている」と批判の対象になるかと思えますけれども。

三番めに、「私が仏になっている」と発言することが憚られる。要するに、学者なのにそんなこと言うのか、あるいは、その証明はどのようにたてるのかということが、問われてきます。そのために言わない方が得策ではないかということです。

四番めに、久成釈尊が、擬神化してしまっただ。現在、日蓮宗では、この久成釈尊を本仏と読み表しておりますけれども、そうした大聖人のお言葉は、御遺文中には出てまいりません。「本仏」という言い方は、玄義の読み方に、「六重本迹」のところで体用本迹を読み損なったところに原因があるのですけれども、そのために、絶対神化してきた。これを仏の擬神化と私は呼んでいます。

そのため、そんな存在にはとてもわれわれはなれない。われわれは救済される存在であるというのが、現在の日蓮

宗に定着している感がいたします。そのために仏になるとは言わない。

最後に、地涌の菩薩は、仏を具足しているので、言う必要はないという主張です。これは教学的にも正当な主張だと思うのですが、ここで地涌の菩薩がいかなる仏を具足しているかというところが正確に語られなければ、これは言いたいと思います。

中にはこういう方がいるのです。日蓮宗は、仏になる必要がない。日蓮聖人もなる必要がないんだと。それを地涌の菩薩だというのだという主張もあります。ただ、その時には、地涌の菩薩が果たしていかなる資格を持った菩薩なのか、問われなければならないと思います。

私自身は久遠実成の釈尊は十界互具の仏。地涌の菩薩は十界互具した菩薩と理解していますので、仏となると言っても、地涌の菩薩のままであるといつて、どちらも誤りではなく、正確にその意味を理解すればよろしいかと思いません。

こうしたことを考えてみますと、今の日蓮宗にとって、われわれの目的とする仏というのは、いかなる存在なのか。今日、四人、それぞれ違う、仏の像が語られたと思うのですが、それを果たして、宗門としてどこに持っていくのか。すべての人が、成仏する喜びを感じられる、そういうところに、いければと思います。

さきほど、話のあった、マインドフルネスというこの問題ですが、これはマインドフルネスの気づきというものが法華経修行の階梯のどこに位置付けられるのが推検されれば、仏門の入り口であり、また、どこでもできるといふことから、仏教に関心を持たない一般の人にとっては非常に入りやすい接点になるのではないかと思えます。

司会 ありがとうございます。すいません、始まる前に申し上げるべきですけども、司会を務めております、現代宗教研究所の主任を拝命しております櫻井と申します。ご挨拶が遅くなりましたして失礼しました。

また、ご発表いただきました三先生には、二十分という大変短い時間にお話頂き、先生によっては早口でお話して頂きました。時間配分に関しましても、多いに考慮すべきだったものと反省しております。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

さて、四先生のお話を伺って、「唱題成仏を問う」という問題について考えてみたいと企画させて頂いたのですが、先生方が考える成仏という状態、というのでしょうか。私は、雑駁に申せば、「命終の後に仏になる」と、いうような、一般の方がお持ちになっているであろうイメージを持っているのですが、今お話を伺っていると、場合によっては、「生きながらにして仏になっている」という状態が現出しているのかなという印象を受けたのですが、四先生は成仏という状態をどのようにとらえられているのか、お聞かせ願えればと思います。

襄輪 私が唱えている成仏は、もう明らかに仏陀の言葉に近い感じで、目覚めているというところで唱えさせていただきました。何に目覚めているのかというと、私たちがどのような原因を持って悩んで苦しんでいるのかというところから、脱却できるかというところだと思います。その人間の心のありようみたいなものをきちんとつかまえたところで、目覚めた人になる。ですから、基本的に、生きているときに仏陀になっていると考えていいのではないかと思います。

仏教の歴史的な展開の中では、身近なところであった仏陀がどんどん遠くになって、そして、自分たちでは到達のできないものと神格化されていくというか、かなり遠くのものになっていったような気がするのですけど、それを、自分たちのものとして取り戻したのが大乘の世界だと思っています。その大乘の世界という点から考えても、この生きている時にきちんと目覚めるというのでしょうかね、その目覚めも、私たちがなぜ悩み苦しんでいるのかというところにきちんと気がつけて、苦しみのようなところに陥らないように、私たちの心が変わっていくというところで仏

陀を考えていいんじゃないかなと。ちょっと極端な言い方かもしれませんが、そう考えております。

『影山』さきほどから申し上げているように、『観心本尊鈔』で日蓮聖人は、仏界は表現できない（信之勿令疑惑）と書いている。そして、菩薩界までは自覚できるぞ（菩薩界一分也）と言います。私はこれが一つの重要な基準になると思っております。なぜなら、宗祖がそうおっしゃっているからです。

その考え方が現代のものの考え方に非常にマッチしているわけです。つまり、世間一般の方々が神学論争、またそれに準じることを敬遠していると言うことです。文献をつき合わせて、それが「合っている・間違っている」といから議論しても、日蓮聖人は仏界は表現できないと断言されているわけですから、自覚できない仏界は文献的に「こう書いてある」というところで議論はストップします。大事なことは、じゃあ、いま、ここで何が具体的に自覚できるかと言うところで、菩薩界の設定があるわけです。そうすると、唱題することで、菩薩界という健康的な意識が自覚できるところへと話が行きつきます。

これをもう少し詳しく申し上げますと、さきほど、色・受・想・行・識の五蘊による認識の話をしました。これは『観心本尊鈔』の前提となる「一念三千」の前提になる『摩訶止観』「陰入境界」の話です。養輪先生は仏教の認識論、名色について話されましたが、名色とは呼吸など自分の存在に気づき、私は息をしていると言語化すること、これが記憶の始まりです。この記憶連鎖が心の鏡、識の認知機能に映ることで、私という自我意識が成立する。自我意識は欲望が前提ですから、意識そのものが煩惱です。『摩訶止観』では、この煩惱を止観の瞑想技術によって、記憶連鎖と純粹意識（マナス）とに分離することができますといいます。日蓮聖人の「法華経並びに天台所述の摩訶止観等の明鏡」という言葉がこれに相当します。そのような瞑想の状態について色界の瞑想とか、無色界の瞑想とか、『摩訶止観』にはできません。無色界の瞑想は、これは純粹に精神性の世界のことですから、肉体的なレベルでは計れない、

スピリチュアルな事柄で議論の対象にならない。

ところが、色界の瞑想というのは心身相関の状態ですから、心が動揺すると血圧が上がったり下がったりするとか、脳波の状態が速いか遅いかで計ることができます。これが現代の心身医学なのです。このような考え方がいま流行しているマインドフルネスが社会に受け入れられた理由で、現代社会では体験できない、計れない仏界などのスピリチュアルな事柄をどれほど語っても誰も興味をもたないし、誰も納得させられないのです。ところが、瞑想技術によって誘導される瞑想体験は、自分の体験ですから、それがマインドフルネスですから、その気づきという部分に関しては計れる、計測できる、エビデンスが取れるので、みんなが納得できるのです。

こういうことが、『摩訶止観』等の文献をよく読んでみると分かると思います。

高佐 十界互具でございますし、「所化以て同体」でございますから、われわれの中に佛様がいらっしやる、私たちが佛の一分を持っているということが、先ほどからお話している通り、唱題成佛の前提となります。佛体、佛の本質があり、佛用、佛の働きが起こる。佛用を起こせた時を成佛と捉える。「南無妙法蓮華經の五字を受持」すれば佛用が起こってくるはずで、もしも妙法五字を受持しても何も起こらないのだとすると、日蓮聖人がお間違えになったか、虚偽を仰ったか、ということになってしまおうと思います。

佛用とは何か。佛としての働きというものをどう捉えるか。現宗研主任在職中には申し上げにくかった言葉ですが、例え「常楽我淨の四徳波羅蜜」というようなことばで、佛用を表現することが可能であると思えますし、先ほども申しましたように、御利益を頂戴したときというのも、成佛している、佛様の働きをいただけている状態であると見做して可いのだろうと思います。ですから、別の言い方をすれば、「ああ、本当に御題目は有り難い」と感じられたとき、今、私は佛様と一緒にいる、とか、御本佛との一体感を感じられたとき、或いは、救って頂けている

と思えたとき、そういうものも、成佛として捉えて可いのだと思います。

私たちは本来佛なのですけれども、佛としての働きがなかなか出来ない、表せない。その私たちが、佛としての働き、その一分を表せたときが、成佛である、ということに宜しいのではないかと思います。

変な言い方になるかもしれませんが、例えば、イチローという大リーガーがおります。イチローは、寝ても起きてもトイレにいてもイチローですけれども、イチローが真にイチローであるのは、やはりスタジアムの中でプレーしているときではないでしょうか。

本来佛である私たちの本来の自己が南無妙法蓮華經の信唱受持によって表出された時、それを成佛として捉える、と考えております。

赤堀 日蓮聖人は、龍口法難の時に、相州龍の口で命を捨てる今、このところは常寂光土であると申されています。常寂光土には、仏がいなければ常寂光土になりませんので、大聖人は成仏されていくということは間違いありません。

その日蓮聖人が、先ほどの資料にあるとおり、お題目受持によって仏になれると言ったので、私は日蓮聖人を信じるのです。その理由は、われわれがなるべき、日蓮聖人がなるべき対象とした釈尊は、十界互具の仏です。そうすると、われわれがその十界互具の中にいなければ、釈尊もまた仏になれないということになります。

そのことを説いたのが、三種教相の師弟の不遠近で、そこを聖人は「所化以て同体なり」と表されたのですけれども、その部分が、今の日蓮宗の教学全体の中で語られることが少なくなっている。天台大師は『提婆品』の「深達罪福相」を引いて、浅く達すると、深く達すると、二段に分けて解釈されています。

日蓮聖人も、そこから二つの懺悔滅罪の方法を読み取られたのではないかと思うのですが、その一つは、自ら許し

て罪を得さすべしと。重き罪は人を教化することに励んで、消滅すると、おっしゃっています。木絵二像開眼之事でも提婆品を引用され、前半は生身得忍、後半は即身成仏に分けられ、三十二相八十種好を具足し成仏するとおっしゃっています。

誰がどう見るかということとは別に、聖人がおっしゃっているのです。われわれが見るか、見えないか、感じるか、感じないかは分かりかねると思いますが、私は、目の前で法華経の信行により、人間が色のない世界から色のある世界に出てくることを目撃しています。これはつまり、一念が変われば、三千世界も変わるのです。

司会 はい、ありがとうございました。

私が聞いた限りでは、四先生とも、私が言ったような命終の後に仏になるというよりは、生きながらにして仏になるというお考えであると考えてよろしいのかと思います。

そうだとすると、命終の後に仏に成るといふ、それまでずっと蓄積したものが、結果、花開く状態になると。それは自分もそうだし、自分のために手を合わせてくれる人の功德も積み重なるということもあると思うのですけども、そういう成仏論というのが、先ほど高佐先生が、最近では論じられていないじゃないかというお話でしたが、襄輪先生、その辺りはあまり触れられてないものなのでしょうか。

襄輪 はい。高佐先生が、確かに日本教学界のテーマとおしなべてくださって、確かに成仏を問うというような感じの特集は今までになかったと思いますし、いろいろな概説書とか、仏教の概説書の中には必ず、「仏とは何か」「成仏するとは」というような感じで、多くの説明が出てきていると思いますので、恐らくそこにまかされていて、それぞれの立場から言及するということがなされていないのかなという感じがしました。

ちなみにですね、私が見ていた中世の時代の法相宗の文献なのですが、その中でも、仏になるというよりも悟りの境地みたいなものなのですが、それはやはり、無分別の境地というのが悟りの境地として描かれているのですが、その時の状況というのは、例えば、視覚で見たときには、すべてがつながっている世界として描かれているようです。色と形だけが分かって、しかし、境界がない。自分が手を挙げて、自分の手と後ろの背景があったら、この両方が一体化しているような、そういうところだと。その時には、心の中には喜びが生じてくるというような言い方をしています。

実際に法相宗の資料の中に、無分別で捉えられている世界のことを、例えば真如と呼んだり、あるいはそれを法性と呼ぶという、そういう記述が出てきます。ですから、実際に悟りの境地みたいなものは、*vipassana*といますか、観の行き着いた先として描かれていて、分別の生じない無分別の世界です。これは、言葉では表現できない世界と言われますから、先ほどの影山上人の考え、ご発表とも一致するんだろうと思うのですが、仏界というのは、言葉では表現できない、そういう世界と考えていて、でも、言葉で言わなければ伝わらないこともありますので、法相宗の文献ですと、無分別の世界というのは、真如とも呼び、法性とも呼ぶという言い方が出てきます。

今日のお話の中で、その悟りの境地というのを、高佐先生が出してくださった資料の中の二ページめに、境智冥合というのが出てきますね。その境と智というのが「合しねれば即身成仏する也」という言い方していますけども、それは捉えられている対象と、それを見ているこちらの心の働きですけども、これがびったりと一致している。他のところに心がいつているわけではなく、その時その時のものをきちんと気づいているのを、境智冥合と表現するんだと思います。

そういう点から見ると、そのような、今の一瞬一瞬をあるがままに認識している時が、即身成仏の状態だと言っているとも取れると思います。これは、仏教の中の伝統的な言葉で言えば、多分、「如実知自心」につながっている

だらうなと思います。

司会 あと、先ほど高佐先生がおっしゃった、「以信代慧」という問題提起ですね。恐らく、日蓮宗においては以信代慧という考え方が支配的だったので、場合によってはその実践というのが存外軽視されてきたような風潮も、あるのではないかと思うのですが、その以信代慧という考え方と、蓑輪先生、影山先生がおっしゃった瞑想の止であったり観であったりという部分、その以信代慧ということに関しては、お二人の先生はどのようにお考えなのかも、お聞かせ願えればと思います。まず影山先生からお願いします。

影山 基本的に止観の瞑想体験というのは、無分別の状態を作ること、思考しない状態を作ることです。そこから考えれば、「以信代慧」とは、疑わない、信じるということは、疑念を抱かないことです。そこでは無分別の状態が出来ているというわけです。率直に「そうですね」と信じられれば、そこに無分別の状態が出来ているので、それはもう瞑想状態と同じ体験をすることになる。

ところが、それは理論的というのは簡単ですが、そこに「以信代慧」という無分別の信という状態を作り出すには、やっぱりお題目をたくさんお唱えして、心身が統一された状態が実現しないといけない。以信代慧という理想的なところと私たちの現実の問題、つまり、観念的な頭の中の問題と実際の体験的な問題をちゃんと整理しておかないと、現代社会では信仰的なことは伝えられない、社会教化は出来ないと思います。

たとえば、『摩訶止観』の瞑想技術は修行者の意識のあり方に即して十段階（十境）で解説されます。その第一が「陰入界境」（瞑想体験によって自我意識を観察する）ですが、ここでは天台大師がご自身の瞑想体験（己心中所行法門）が語られており、瞑想経験の浅い私たちにとっては観念的な記述で具体的には理解できません。

ところが、十境の第三に「病患境」（瞑想体験によつて病気を観察する）では、漢方医学による病気の治し方と、インド医学による病気の治し方が示されており、その最後にそれらの医学的な病氣治しより、止観の瞑想技術によつて禅定三昧が誘導され心身が調えば病氣は治ると明文化しております。

つまり、瞑想体験によつて、私たちは病苦のない状態、完全な状態になれるといつてるわけですから、完全なものが私たちの中にあるという。ということは、そこに成仏の原型なりがあるというように理解できると思うのです。これが私の以信代慧の理解の仕方です。

司会　ありがとうございます。

襄輪　私の理解も、実は影山さんと基本的には変わらないところでありまして、以信代慧と関わる、関連する表現と思われるものが、実は京都系の僧侶の中にあります。

例えば、法然さんの時には、念仏為本という言葉があつて、唱えることが一番元であるということが出てきます。その次に、親鸞さんの段階になりますと、信心為本と変わつて、信じることが元であると、少し展開が存在していません。

なぜ信じることが大切なのか、それはどういう心の状況を作り出しているのかというと、そのままに全部受け止めていくことができると考えているからです。つまり、浄土教の中では、阿弥陀様の計らいによつて今があると考えています。江戸時代の川柳に「何事もあなたまかせの南無阿弥陀仏」という有名な言葉があるので、どのようなことが起きてても、すべて阿弥陀様の計らいであると考えて、あらゆるものを受け止めていくと。そのとおりに今あったことを受け止めるというのは、正に止観が目指していた世界、境智冥合の世界であつて、私たちはとかく計らい

の心を起こしがちです。その計らいの心が次から次へといろいろなものを生みだしていつて、あるがままに受け止めることができない、そう考えています。

ですから、止観によってそれを可能にすることと、信をもってそれを可能にするということの、多分二つの道が開けてきたと言えましようか。わかり易さという点を重視したのが、日本仏教の中の特徴として一つあるのではないかと思っています。

これは、法然さんの言葉の中に、念仏がどんなものかと言っている時に、止観の念仏にあらず、それから悟りを開こうと思つて唱えている念仏でもなして、ちよつと正確な言葉を覚えていませんけども、『一枚起請文』という資料の中にそのような言葉が出てきます。

それによって何が変わつたのかといいますと、修行しないとその境地にたどり着けないのであれば、凡夫ですね、私たちのような凡夫がそのような境地に到達することはなかなか難しい。でも、それはですね、多くの人たちに可能なものとして開かれていったのではないかと説明されることがよくあります。

実際に資料をもって以信代慧といったときは、その信によって同じような境地を多くの人たちに開いていくことができたというところがあるのではないかなと思いますので、目指されている世界は基本的には同じなのではないかなと思います。

司会 ありがとうございます。

あと、もう一つ私からお伺いしたいのは、私の極めて浅薄な理解だとすればご指摘いただければと思うのですが、日蓮という方は日蓮大菩薩。菩薩号で、我々は勧請や、回向を行つたりしていると思うのですが、そもそも仏教において指導的な立場にある方は、成仏にあえて到達せず、菩薩という立場で衆生を救うというような役目があるという

ことを、昔大学で習ったような気がします。そうだとすると、仮に日蓮聖人が、成仏が可能な状態だったとしても、菩薩という状態で留まり続けていると考えられるのかなと思いますし、例えば我々、日蓮宗のお坊さんも、檀信徒には、成仏の可能性は当然、今日聞いたようなことを踏まえてお話しするべきでしょうし、我々僧侶は死ぬ時までではやはり、さらには死んだ後も菩薩でい続けなきゃいけない、そういうことはあるのかな？　なんて思うのですけれども、すみません、私の稚拙な質問に先生方がどうお答えいただけるのか、ちよつと興味があるので、今度は、赤堀先生からお答えいただければと思います。

赤堀 今の問題を、大学で論議されているというのは、聞かなかったのですが、巷間では論議されていますね。

大学、学術的にも、従因至果、従果向因という、仏界から降りてきた菩薩であるというような言い方をするのですが。そういう説は、私は、天台大師にも日蓮聖人にもあるとは思えないのです。

その答えになるかどうか分かりませんが、日蓮聖人は階梯を登って仏になる必要がない。なぜなら、九界のままでも仏であるというのが地涌の菩薩です。この点が明確ではないと思うのです。仏になるために修行をしている一般の菩薩、迹化の菩薩に対して、本化の菩薩というのは十界を具している菩薩である。それが地涌の菩薩という意味だと思っています。

高佐 はい。日蓮聖人は、本化上行でございますので、菩薩でいらつしやいます。しかし、法華経では、地涌の菩薩は三十二相を具えておられます。ので、佛であると言っても可いのかも知れませんね。

お答えになるかどうか分かりませんが、御参考までに申し上げますれば、私が立正の大学院に在籍しておりました頃でしようか、或る先生に「お釈迦様はお覚りになられた後、何をしていたと思う？　菩薩行をしていたんだよ」と教え

ていただきました。なるほど、と思いました。以上です。

影山 どうお答えしていいかわかりませんが、先だって勸学院の研究会議のときに、庵谷先生が、日蓮聖人は最晩年まで天台大師講を毎月二十四日営まれていた。その中で主に講義されたのが『摩訶止観』五の巻だと教えていただきました。『観心本尊鈔』の冒頭にも「五の巻」云々と引用されているとおりです。ここに何が示されているかと言えば、仏教心理学の「陰入境界」です。つまり、五蘊、十二処・十八界です。

これは龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』を引用し、その時代の仏教心理学によって自我意識の一念、つまり、私たちの思考・感情・身体感覚など認知の全体を解説しています。さらに天台大師はご自分の瞑想体験を五蘊によってどのように煩惱が生じるのか解説しています。これは『摩訶止観』も、『観心本尊鈔』も、それらは思想信条の文献ではなく、瞑想体験を記述した心理学書だといえます。

その時代のものの考え方、理解の仕方は仏教心理学としての「陰入境界」、とくに五蘊によって、物事の認識のあり方を考えていたということです。さきのように記憶連鎖（四蘊）が認知機能（識蘊）に映ることで自我意識（煩惱）が成立しているわけですから、私たちが死ぬとき、肉体に付随している記憶連鎖は一緒に滅んでゆき、純粹な精神性である識陰の純粹意識は、何らかの形で残ってゆく。それが次の世へと生まれ変わる原因になるというように、その時代の仏教心理学の考え方で理解しています。つまり、肉体に付随する記憶などは肉体の死と共に消えてゆくでしょうが、この識蘊、認知機能に関するものは残るのではないかと思います。

蕤輪 ブツダは悟られてからどういう生き方をされたのか。日蓮聖人も誓願を立てられて、そして結論を得られてから、立正安国を正面に標榜して、そして実際の活動の中ではたくさんの人たちに慈しみの気持ちを抱き、哀れみをか

け、人の喜びを自らの喜びとして、そして、いつも中立的な、といっても中立的だったかどうかは、時々「念仏者の首をはねよ」とか、激高していらっしやる時もありますけど、その生涯というのは、基本的には菩薩行をずっとしていらっしやっただと考えるといいのではないかと思います。

今、先に述べました、四つの行いというのは、インド仏教の伝統から語られている慈悲喜捨という四無量心でありまして、その四無量心の実践にずっと努めていらっしやっただと。お釈迦様、生涯は三十五歳で悟りを開かれてから、この教えを次の世代に伝えなければ、世の中は苦しみのままであるというように考えられて、それを一生涯人に伝え、自ら、人にも実践してもらえるように生涯を過ごされたのだと思います。日蓮聖人の場合も、お悟りといえますか、気がつかれてから、それを多くの人たちに実践してもらえるためにですね、生涯を過ごされ、それは正しく菩薩行であつたのではないかと思います。

私も、影山先生が今おっしゃられましたけど、勸学院の方に出ておりました、庵谷先生から、日蓮聖人が大師講をされていた時に、講じられていたのが、『摩訶止観』の五の巻であるというのをお聞きいたしました。実際に提示してくださいましたご遺文の中に『摩訶止観』の五の巻がかなり出てくるのにびっくりしました。実際に、その「正修正観章」のところを常にご信者さんたちにお説きになられていたのだというのは、目からうろこみたいところがちよつとありまして、具体的にそういう形で多くの人たち、ご信者さんたちにも勧めていらっしやっただなというのが、何となく伝わってきたような気がいたしました。

司会 ありがとうございます。

いつまでも私の稚拙な質問をしていても、会場の皆さんも退屈でしょうから、ご質問がありましたら、挙手にて、お名前、ご所属を言って頂いた上でお願い致します。どなたかご質問のある方、いらっしやいますか。

質問 1 秋田県の本澄寺から参りました、柴田と申します。本日は、蓑輪先生のご講義とお三方のお話を本当に興味深く拝聴させていただきました。ありがとうございます。

蓑輪先生にお伺いしたいことがあるのですけれども、体、あるいは特に脳の働きと成仏との関連についての問題点について、二つばかり教えていただきたいんです。

一点目は、先生の先ほどのお話の中で、初めは言葉を使って気づいていくが、しばらくすると言葉を使わずに気づいていくということがございました。その、初めの言葉を使って気づいていくことは、すなわち体だとか脳でいろいろ考えたり、五感を使って、いろんなことに気づいていくことだろうと思えますけれども、その後、言葉を超越して、言葉を使わずに気づいていくことは、智慧だとか領解とかいう言葉になっていくのだろうと思います。すると、その時点で脳の機能から離れていくのか、それとも、脳の中で言葉を使わずに何らかの形で物事を理解していくのか。その、いわゆる成仏ということと、肉体的なものとがどのように相関していくのかという質問であります。

二点目は、その流れですけれども、先ほど高佐上人のお話の最後のところで触れておられましたけれども、私たちの肉体が健全であれば、いろんなことを考えて、先生方からご指摘いただいたようなことを考えながら、自分がいかにして成仏するかというようなことを考えて実践しうるのですけれども、そこに何らかの障害があったり、問題があった場合には、そういうことが不可能になってくる場合も往々にしてあるわけであります。それは必ずしも生来のものでなくても、途中で病気をしたり、事故に遭ったりというようなことも、あるいは最近であれば認知症ということもあります。

そんなことになると、肉体的な、あるいは脳の機能が衰えてしまうと、成仏に対する方向性も失われてしまうのか、といったことも、私たちは考えなければいけないことだろうと思えます。成仏ということが肉体から離れてありうるのかどうなのか、その辺のところを二点目の質問であります。よろしく願います。

襄輪 はい。言葉を使って気づいている世界から、言葉を使わずに気づいている世界に入っていくんだと思うのですが、最初にも、例えば呼吸に気づいてくださいと指導者の方に言われた時に、それを聞いていた私たちがですね、どのようにしてその呼吸を気づいていくかなんですけれども、人によっては、「出る」と、鼻のところにちよつと神経を集中させて、吸っている、空気が入ってくるのを心の中でつかまえ、唱えるようにして「入る」確認するといった方がいいですかね。それで、出て行く時には、出るという言葉を使って唱える人もいらつしゃいます。それから、そうではない感じで、ただもう気づくといっている時に、空気の流れを感覚的につかまえていくことかなと思つて、感覚的につかまえる方もいらつしゃいます。

それで、どちらが正解なのかというと、実は正解はないと思うんですけど。両方ともいいと思うんです。ただ、自分の動きに気づいてくださいと言われた時に、具体的にどのようになることが気づくことなのかということが、なかなか分かりにくいと思います。

それで、*saipatthanasutta*の中に出てくるのは、正念・正知という言葉ですが、最初は一緒に使つてやっているようです。たとえば、足を上げる時には動きと一緒に足を「上げて」、出した時にも「出して」、それで、下ろす時にも「下ろす」と心の中で言葉で確認していくんですけども、慣れてくると、自分の言葉による確認がなくても、その動きをとらえている心の働きというのが自然に生じてきます。ここのところは、実は、体験してみないと、その心の動きみたいなものが分からないと思います。多分、言語を介さないで気づいている働きが生じてきていて、それが多分、*sampajāṇa*（正知）と呼ばれている働きなのだろうと思います。

そうすると、日常生活の中でその働きは、実はないんです。私たち、歩いている時に、自分が歩いている、足を上げて前に出して下ろしているという自分の動きを、分析的に見ることって普通はないと思うんですね。もう、自然にこう、歩いていますし、歩いている時に他のこと考えて、「さあ、今日は仕事何やろうかな」とかですね、「今日早く

帰らないといけないな」とか、いろんなことを考えながら動いていますから、自分の歩いているってことを対象化して気づくということをしていません。手を挙げる時もそうですね。手を挙げる時にも、「自分が手を挙げている」と気づきながらやっている人なんていません。

でも、それを対象化して気づこうとする時の最初の工夫は、多分言葉を使って、挙げている、挙げていると確認しながら、自分の動きを確認していくことです。そういうのをやっているうちに、言葉を使わなくても、自分の動きがきちんと、そこに心が行くようになってきます。それが多分、智慧という新しい心の働きだと思います。

それで、その働きは、恐らく外界はちゃんと見ているのだと思います。これ、なかなかそういう境地まで私も行ってないので何とも言えないところがあるのですけども、見えている世界が、色と形だけという世界と申し上げますけども、例えば後ろに今額がかかっていますけども、ぱっと見た瞬間にもう私たち、「但行礼拝」って読んでしまいがちです。ところが、漢字が分からない人に見れば、あれは、ただ何か黒と白の何か描かれていて、意味も多分伝わってこないと思います。

そのような形で自分の視覚を通して、脳の中に描かれた影像があつて、それをただとらえている働きというのがあるということに、お釈迦様は気がついたのではないかなと思います。それで、その働きが今の一瞬一瞬をきちんとつかまえている働きであると。実際にその対象を、その時その時にはつかまえている働きが意識されるようになってくれば、自分の心が何かいろんなものの外観を認識したにしても、次から次へといろんな働きを起こしていくことから離れていきます。

人間の心って、実は、何かあると自動的に受けとめて、自動的に様々な思いを起こしていくのが普通のあり方ですから、そのあり方からちゃんと離れていくことができると、そのところが恐らく悟りという言葉で示されていくのだらうと思います。

一番の理想は、言語機能が働かないで、ちゃんとつかまえている智慧の世界だと思うんですけども、言葉を介在させながら今の一瞬一瞬をとらえていってもよいと考えているんだと思います。それが恐らく名色の分離と呼ばれているあり方で、それでも私たちの心はその先に進んでいかなくなりますので、目指していた悩み苦しみが生じてくるような状態からは、離れていけるのではないかなと思います。

二つめの質問の方は、肉体から離れているのかというものでしたが、決して頭の中での精神的な部分だけではなくて、常に自分の体と心というのが、一緒になって動いているというのが、多分目指されている世界ではないかなと思いますので、肉体を抜きにしては、恐らく考えてはいないのではないかなと思います。

ただ、身体の健康とかです、そういう点から見えていくと、もう少し違った視野も入ってくるのかなと思いますが、そのあたりは多分影山上人の方が詳しいのではないかなと思います。

質問1 ありがとうございます。

私の質問の主旨は、今のよう形で、一人の人間が志して仏になっていくプロセスをたどっていくということに関するご説明については非常によく分かるんですけど、しかし、先ほど主任がおっしゃったように、死後の成仏とか、そういった時点になっていくと、あるいは釈尊の御魂が今私たちに語りかけている、あるいは日蓮聖人の御魂が今私たちに語りかけていく、いる、そういった意味での、釈尊や日蓮聖人、あるいは先師の魂がどういう状態にいるのかということと考え合わせてみるとですね、必ずしも肉体的に物事を考えたことだけでは済まされない部分が多いのではないかな。その部分についてどう考えればいいのかと、その点だったんです。

養輪 はい、分かりました。二つめの方は、正に仏教の歴史の中で、お釈迦様が亡くなった以降に多分出てきている

感覚だと思うのですが、仏さんの身体に対する考え方が、肉身を持ったものと、肉身を持たない法身という名前のものが出てきて、その延長線上に、常に現実の社会に対する見方ができてくるような気がします。時間と空間を超えて、その聖なるものみたいな、お釈迦様の魂というのでしょうか、それが常に働きかけているのだという意識は出てくるのだと思います。

それはとても大事なことだと思えますし、その真実のあり方みたいなものが、常に世界の身の回りのものに全部現れていると見ますと、言葉が悪いかもしれませんが、本覚的な感覚というものも多分それで説明できると思えますし。でも、それはすごく、私は大事な感覚ではないかと思っています。

質問1 ありがとうございます。その最後の部分が、例えば障害を持っている人だとか、認知症の人だとか、そういう人たちに対する救いになっていくのではないかなと思いましたので、大変貴重なご意見、ありがとうございます。ありがとうございました。

司会 はい。そろそろお時間となりました。私の拙い司会にお付き合い頂きました、四先生もご来場いただきました皆様も、どうもありがとうございます。

以上をもちまして、第二十六回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナーを終了させて頂きます。いま一度、四先生に拍手をお願い致します。ありがとうございます。